



理詰めで考えることが好きだった私は大学の理学部で学び、大学院修士課程修了後、東邦大学理学部の助手に公募で採用された。当時は学生結婚がちよつとしたブームで、実は私も院生の時に結婚していたため面接では、「結婚されていますが仕事はずっと続けますか？」と聞かれた。即座に「もちろん、続けます。それを前提に結婚しました」と答えた。入職後に一人の同僚から、私が採用された決め手は結婚していることだった、と聞かされた。結婚して応募してきたからにはずっと継続してくれるだろう、と同僚たちから期待されていることが分かった。私はどんなに苦勞をしてもその期待を裏切ることだけはしないと心に誓った。

■ □

数年の間に2度の妊娠・出産を経験し、6週間の産後休暇明けから保育所にお世話になった。夫の理解の下、家も大学の近くに購入し、夫が帰宅すると子どもの世話をバトンタッチして、私はまた大学に戻って実験した。こうして京都大学に学位論文を提出することができた。

日本女性科学者の会の活動にも力を入れた(中央)

はたらくこと いきること

# 理工系女性の想い

苦勞あるも子が癒やしてきた。

育児の苦勞は多いものの、日増しにかわいくなる子どもの成長にどれほど癒やされたことか。自分の実験がうまくいかず、気持ちが悪くさいでいても、保育園に迎えに行つてわが子の喜ぶ顔を見るとさつと気持ちを切り替えることができた。学会で海外出張する際は、多忙な中でも子どもと夫の1週間分の夕食のおかずを冷凍保存して出かけるなど、母になれば人は優しくたくましくなれるものだとはよく分かった。若い方々にも「ぜひ親になつて」とお勧めしたい。

■ □

東邦大学の前身は帝国女子医・薬・理専だったので、周りには先輩女性教員も何人かおられ、その方々との出会いも忘れられない。私の

## 若い皆さん「ぜひ親になつて」

子育てが一段落ついたころ、同じ理学部の数野美つ子先生(故人・日本女性技術者フォーラム初代運営委員長も務める)から日本婦人科学者の会(現日本女性科学者の会)の事務局を手伝ってほしいと言われた。当時の会長は薬学部の幾瀬マサ先生(故人)で、私は入会後まもなく理事として、数野先生、佐渡昌子先生とご一緒に事務局の業務を分担し、引き続き数野先生が会長に就任後も事務局は東邦大学で引き受けてきた。会の奨励賞・功労賞の贈呈はこの時に始まった。何年かして自分自身も会長を務めたが、一貫した私の思いは「女性が仕事も家庭も大切にしながら、肩肘張らないで自然体で生きられる社会の実現」である。理系の仕事は、特に実験研究に従事している場合は多くの時間が必要だが、出産後の一定期間

は覚悟を決めて低空飛行せざるを得ない。でも介護と違って子育てから解放される時期は予測できないのだから、それから頑張っても遅くない、そんなゆとりのある優しい社会の仕組みを実現したいものである。

▽ ▲

東邦大学名誉教授・東邦大学男女共同参画推進センター顧問 大島 範子

△プロフィール▽70年お茶の水女子大学理学部卒。72年同大学院修士課程を修了し東邦大学理学部助手。理学博士(83年京都大学)の学位取得後、東邦大学講師、助教授を経て93年理学部教授。09-12年理学部長・東邦大学男女共同参画委員長、13年定年退職。この間、日本女性科学者の会会長(07-11年)を歴任。

